

## 2019 年度春季大会報告要旨

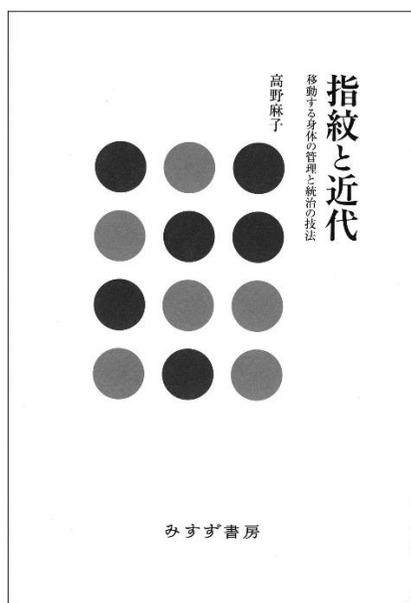
「満洲の記憶」研究会は、2019年7月13日に研究報告の場として、2019年度春季大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、第1部として高野麻子氏に研究報告「日本帝国における身体管理と知の創出——個人識別・遺伝学・医学の交差点」をしていただいた。続けて第2部として「満洲の記憶」研究会のメ

ンバーによる活動報告を行った。甲賀真広「『満洲の記憶』研究会と公主嶺」、大石茜「公主嶺小学校同窓会の変遷と特徴」、湯川真樹江「ある留用者夫人日記の紹介と分析」というタイトルで、公主嶺に関する調査・インタビューの成果や意義、さらに今後の課題について、参加者による多方面での議論を行った。

### 第1部

高野麻子（明治薬科大学専任講師）「日本帝国における身体管理と知の創出——個人識別・遺伝学・医学の交差点」

本報告では、「満洲国」で実施された指紋登録の実態を明らかにするとともに、指紋が個人識別だけでなく、遺伝学、人類学、医学的関心のもとで、人の管理にかかわっていたことを指摘した。報告の前半では、拙著『指紋と近代——移動する身体の管理と統治の技法』（みすず書房、2016）をもとに、指紋による個人識別の歴史的変遷と、「満洲国」での大規模な指紋登録、とりわけ都市部の労働者を対象に実施された指紋登録制度を取り上げた。



『指紋と近代——移動する身体の管理と統治の技法』（みすず書房、2016年）

「満洲国」では、犯罪者指紋と労働者指紋を管理するために 1939 年に指紋管理局を設置し、毎月 10 万枚の指紋原紙を管理していた。そこで、なぜ管理の手法に指紋が選ばれたのか、実際にどのように運用されていたのかについて概説した。

後半では、指紋管理局に保管されていた指紋原紙が個人識別だけでなく、人類学的研究の資料としても用いられていた事実、そこに軍医がかかわっていたことを指摘した。こうした指紋への幅広い関心は、「満洲国」だけではなく、当時の日本の医師（とくに法医学者）を中心に、朝鮮、台湾にも広がっていた。かれらは、多様な地域のデータを収集・比較するなか

で、人種の分類をはじめ「日本人」の範囲や定義づけを試みていた。

以上から、指紋による身体管理は、個人識別という個の管理から人種という集団の管理を貫くものであったことがわかる。本報告で提起した内容は、「満洲国」の独自の文脈を浮き彫りにするとともに、日本帝国の形成・維持を目的に、どのような身体管理の技法や知識が必要とされていたのかを明らかにするものである。さらに、ここでの問題関心は、身体管理が複雑化する現代社会において、依然としてなくなることのない差別や選別の実態を考察する視点にもつながると考えている。

## 第 2 部

甲賀真広（首都大学東京大学院生・日本学術振興会特別研究員 DC1）『満洲の記憶』研究会と公主嶺

大石茜（筑波大学大学院生）「公主嶺小学校同窓会の変遷と特徴」

湯川真樹江（香港中文大学歴史系訪問学者）「ある留用者夫人日記の紹介と分析」

「満洲の記憶」研究会の甲賀真広、大石茜、湯川真樹江は、2019 年度春季大会の場にて、近年の研究会の活動の一環、特に公主嶺という地域を中心に展開した史資料収集やインタビュー、現地調査、それらを利用した一部の研究成果について報告

した。本要旨では、各報告の内容を割愛して、研究会と公主嶺との出会いを中心に紹介する。

研究会がこのように公主嶺という地域に関する多くの調査を展開できた背景には、土屋洸子氏との出会いがある。研究会メンバーの大石茜は、満洲引揚者の竹内テル子氏の紹介により公主嶺小学校同窓会事務局の幹事を務める土屋洸子氏と知り合った。2017 年 1 月、大石は土屋氏のご自宅を訪問し、満洲での経験についてお話をうかがった。

はじめは大石の個人的な研究活動であったが、土屋氏は公主嶺の歴史について

非常に詳しくあったため、研究会として土屋氏に引き続きインタビューをさせていただくこととなった。これまで10回にわたりご自宅でインタビューを実施している。さらに土屋氏のご厚意により、公主嶺小学校同窓会や37回生同期会に参加させていただき、また様々な公主嶺関連史資料をご提供いただいた。

その史資料のなかには、土屋氏個人や家族のモノ、公主嶺関連団体の資料などが含まれている。例えば、池田雪江日記（土屋氏の母親）、家族写真、回想録、各種関連団体の会報、公主嶺関連資料集、公主嶺小学校同窓会写真アルバム、書簡、ハガキ、地図などが挙げられる。さらに、同窓会への参加を通して細谷和子氏とも知り合うことができ、細谷氏からも貴重

な関連史資料を研究会にご寄贈いただいた。

公主嶺は大連や哈爾濱、長春（旧新京）、瀋陽（旧奉天）のような大都市ではなく、小さな地方都市である。こうした様々な史資料を収集できたことによって、公主嶺という一地域の歴史を複眼的に検討することが可能となった。それは、日本人の満洲生活や戦後の満洲記憶などの理解にもつながるだろう。

今後、研究会ではこれらの史資料の整理やインタビューの整理を進めると同時に、それらを利用した研究を継続的に進める予定である。最後にこの場をお借りして、長きにわたり研究会の活動をご支援、ご協力いただいた土屋洗子氏に心から感謝の意を表したい。